



人生なるがまま

上田 昭 1953年(旧制度)卒業

昭和23年10月のある日、ラジオのニュースで京都大学の湯川秀樹教授が原子物理学部門で中間子発見の功績で、世界的に最も権威のあるスウェーデンのノーベル委員会によって、ノーベル物理学賞の受賞者と決まったことが報道された。これは湯川博士が、日本人として初のノーベル賞受賞者であることを意味していた。

1929年 熊本市に生まれる

碩台小学校、中学済々黌、第五高等学校、
京都大学工学部卒

1953年 浦賀ドック(株)入社在職7年

1960年 ヤマハ発動機(株)入社在職2年

1962年 スウェーデンに渡り、スタル・
ラバル社(後年 ABB STALと改名)
入社在職32年

リンショピング大学講師兼任、国際ビジネスコンサルタント

1994年 ABB STAL 社定年退職、日本人として家内と共に
スウェーデンの年金を受け、現在に至る

著書:『日本のハイテク』(スウェーデン語)

1985 Ingenjorsforlaget



私はたまたま、どの国立大学を選ぶかに迷っていた折なので、湯川博士にあやかろうと、まったく迷うことなく京都大学を選んだ。

機械工学科の蒸気原動工学担当の菅原教授は国際蒸気表の権威で、自筆の蒸気原動機の本を教科書として使っておられた。その教科書の中で、蒸気タービン工学の先駆者として、スウェーデンのドラバル博士とユングストローム兄弟の発明があり、そのパイオニア的な技術開発が私には強く印象に残った。

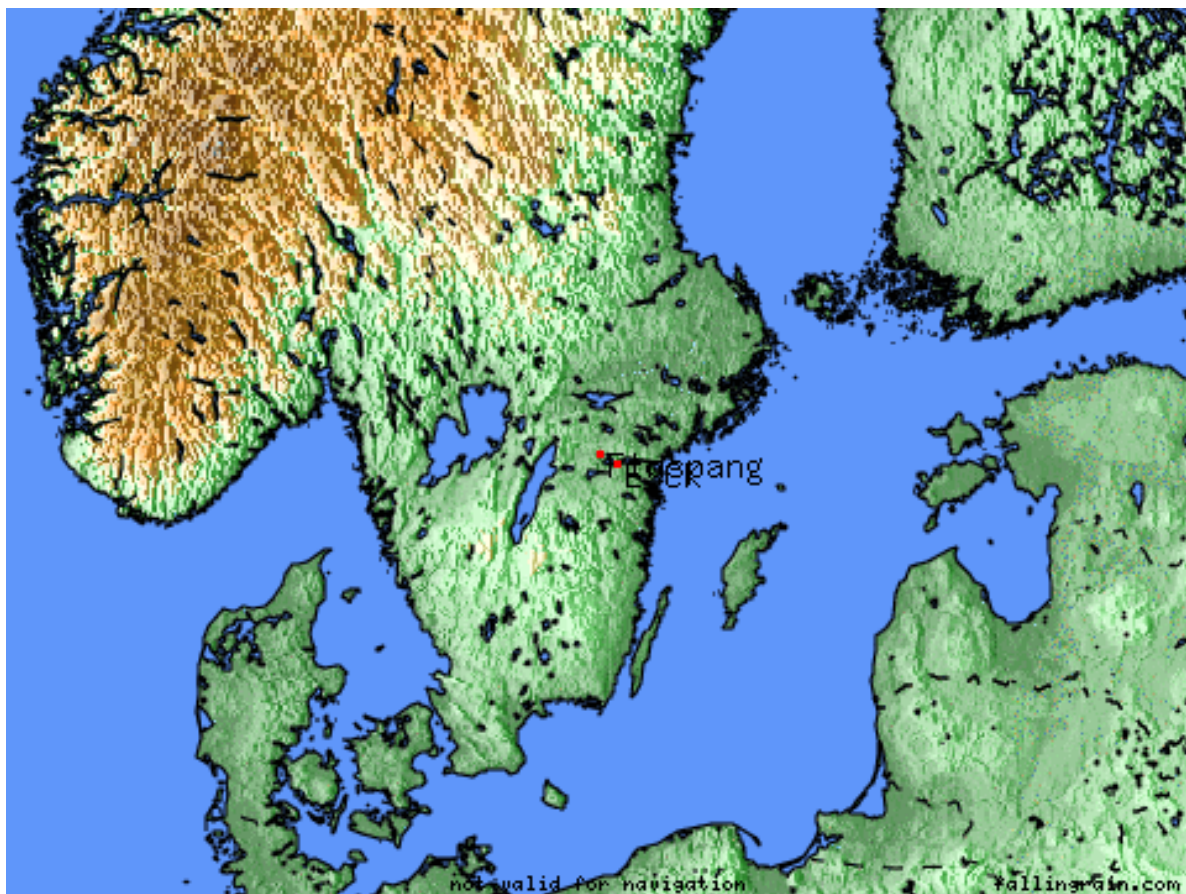
京大卒業後、当時の就職困難な時代に、最後にやっと掴んだ会社が浦賀ドック社だった(注:後に住友重機械と改名)。この会社が昭和31年にイスラエルより2隻のタンカーを受注した際、これに搭載する17600馬力の主力タービンをスウェーデンのドラバル・タービン会社から技術導入することになり、早速、私はスウェーデンに派遣されることになった。京大時代、夢に見たドラバル社で技術習得し、ユング社長以下、社員達との暖かい交流を得、約半年の後帰国し、浦賀ドックとドラバルとの共同作業で、主力タービンは完成し、満足した船主に引き渡された。

その後、私は一時ヤマハ発動機社で2年程各種オートバイの開発に従事、たまた

ま大阪に出張中、私はなんと旧ドラバル社のユング社長と再会することになった。

その際、ユング社長の切なる要望で、私はスタル・ラバル社に正社員として就職することになり、

昭和37年7月5日、家内と当時2歳の長男と共に、スウェーデンに引っ越すことになった。



スタル・ラバル社のあるフィンスポング市は人口僅か1万足らずで、原子力、火力発電用、各種工業用、船舶用の蒸気タービン、ガスタービンなど、高性能技術の機械を製作する産業都市であるが、森と湖に囲まれ、今なお17世紀の面影をたたえ、伝統を備えた壮大なフィンスポング・ハウスや、その前に広がる大庭園や、近代的な工場と、その周りに広がる市の建物、住宅がうまくマッチした、清潔で静かに落ち着いた、綺麗な小都市である。

因みに、このフィンスポング・ハウスはその昔、スウェーデン公爵アクセル・フォン・フェルセンが、ハウス主人の娘エミリーと恋に落ち、白馬を駆使して館に通ったことで知られている。またフェルセン公爵はフランス革命前夜、ルイ16世王妃のマリー・アントワネットの恋人として、王妃を救わんと活躍した物語として、日本では宝塚歌劇団の所謂（ベル・バラ）の指針となったことでも有名である。

このフィンスポング・ハウスは産業人ルイス・デイエルが、自分の館として1668年にオランダ人設計の建築で、現在もスタル・ラバルから名前を変えたシーメンス社のメインオフィスとして使用されている。例えてみれば、徳川四代将軍家綱の時代に建てられたお城が、今なお大会社のオフィスとして立派に使用されている。

家具付マンションの予定が外れて、家具は自分で調達することになり、早速ユング社長の保証で、銀行から家具一式その他家財道具購入に必要な十分な資金を借りることになり、家具その他一式を IKEA のカタログから選んで購入することになった。因みに、IKEA は現在世界最大の家具販売チェーンとなっており、東京その他の都市に販売ホールがあるが、当時は創業者カンプラード氏の生まれ故郷エルムフルト市に唯一店あっただけである。同氏は現在、世界最大富豪の一人でもある。

(つづく)



(<http://www.sverigeturism.se/smorgasbord/>)

—— 京機短信への寄稿、 宜しくお願い申し上げます ——

【要領】

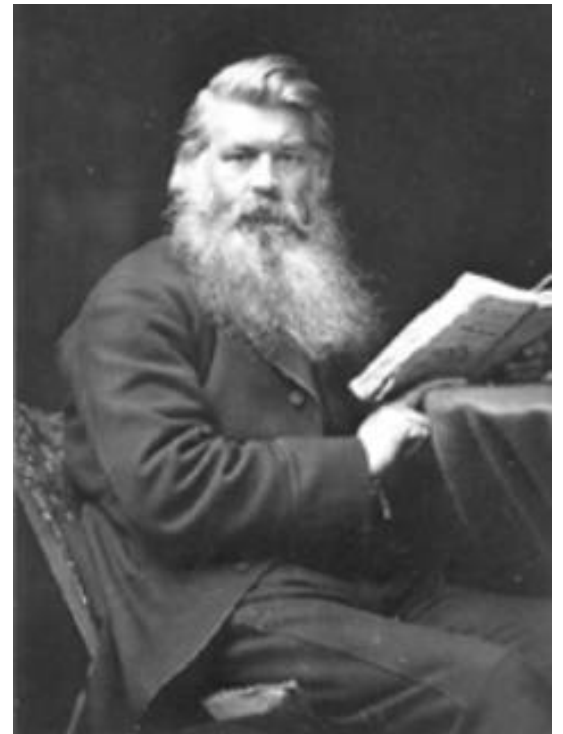
宛先は京機会の e-mail : jimukyoku@keikikai.jp です。

原稿は、割付を考慮することなく、適当に書いてください。MSワードで書いて頂いても結構ですし、テキストファイルと図や写真を別のファイルとして送って頂いても結構です。割付等、掲載用の後処理は編集者が勝手に行います。

宜しくお願い致します。

7. 電力供給の先駆者たち

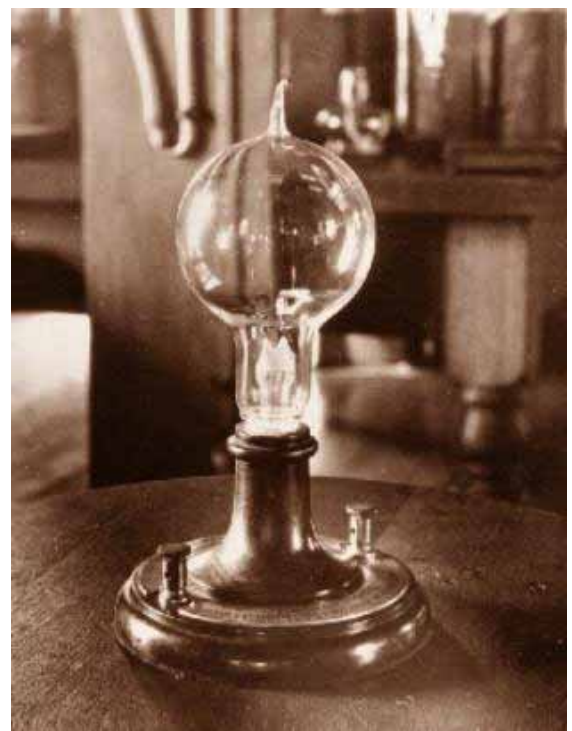
琵琶湖疏水が建設された時期は、Edison らによる電気の時代の幕開けでもあった。われわれにとってはあまりにもあたりまえすぎてピンとこないかもしれないが、電灯の恩恵に浴した福沢諭吉が「一身にして二生」を得たと述懐したように、電気による最初の大きな恩恵は照明であった7)。年表 1 (次号掲載)にも示したように、ガス灯に代わって、電気による初期の照明はアーク灯であった。しかし、アーク灯は夜間の戸外の照明には適しても、われわれが読み書きするには眩しすぎた。英国の物理学者 Swan によりアイデアが出された白熱灯(incandescent light)が Edison により実用化された



Sir Joseph Wilson Swan
(1828-1914)



Thomas Alva Edison
(1847-1931)



Edison の白熱灯
(1879)

図7 白熱電球を発明した Swan と Edison

のは，田辺朔郎が工部大学校専門科に進級した 1879 年であった⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。(図 7 参照)

Edison を語る時、無数の発明に目を奪われて忘れてはならない重要なことがある。それは、電気というエネルギーを集中的に発電して供給するシステムを構築したことである。昨今でこそ分散型電源がエネルギー利用の効率化の点から注目されているものの、電力を広域に輸送するシステムの導入は、人類にとって革命的なことであったといえよう。1882 年 9 月 4 日、New York の Pearl Street に発電所を設け、地下ケーブルを通して電力供給し、電球点灯のデモンストレーションを行ったことは、まさに電気時代の華々しいオープニングであった。(図 8 参照)

その偉大な Edison も電流の選択だけは誤った。セルビア出身で磁束密度の単位にその名を残す Tesla は渡米後の 1882 年、Edison の下で直流発電機の研究をしたが、Tesla の対象は次第に交流発電機や交流モーターに向かって行き、交流機器に理解を示さなかった Edison からやがて独立する。鉄道の空気ブレーキ等の発明で実業家として成功していた Westinghouse は、Tesla の交流発電機や交流モーターの特許を買い取り交流送電方式を提唱し、直流送電にこだわる Edison との間で、壮絶な

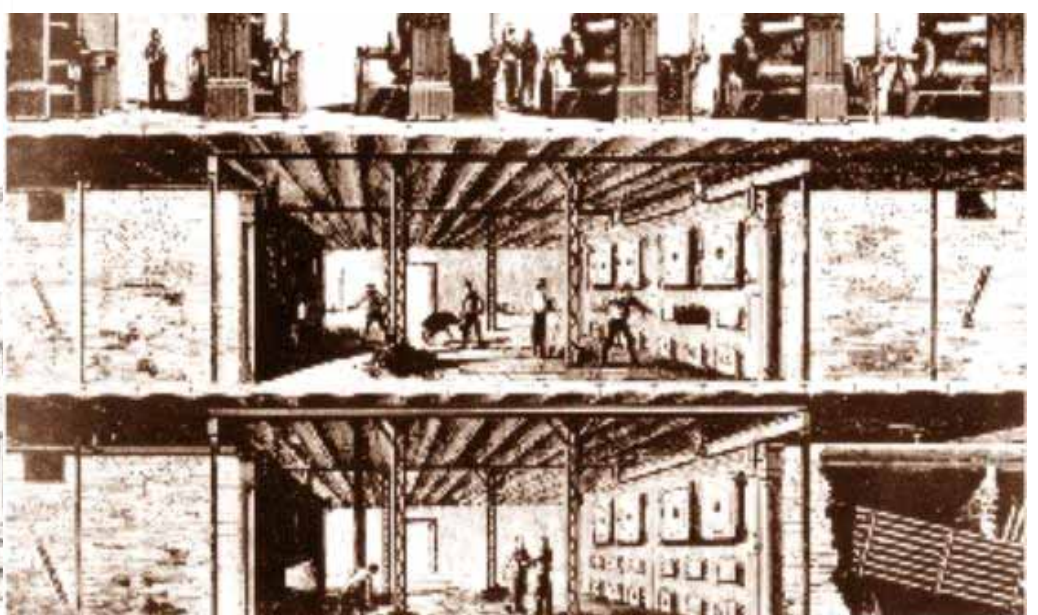
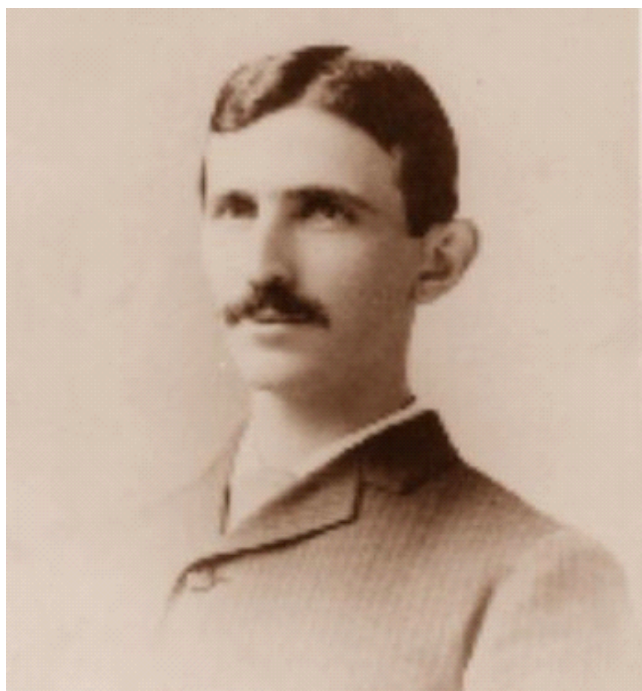
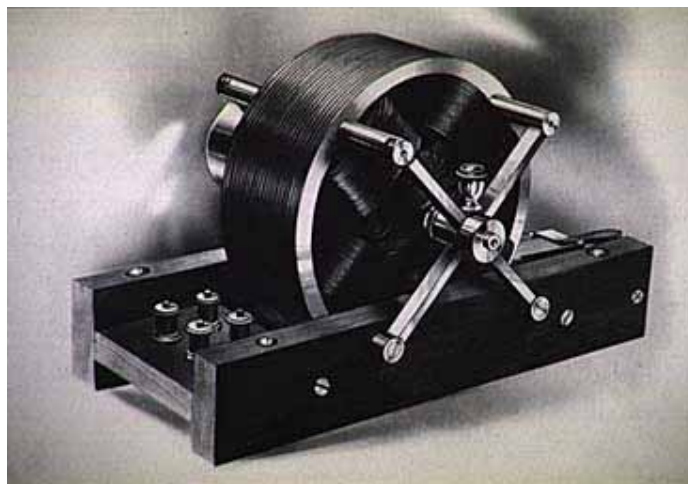


図 8 Pearl Street Station



Nikola Tesla (1856-1943)



Tesla の2相誘導モーター (1888)



George Westinghouse (1846-1914)

図9 交流電力を推進した Tesla と Westinghouse

いわゆる「電流戦争」を繰り広げる⁹⁾¹¹⁾¹²⁾
¹³⁾。しかし、自在な変圧という点で圧倒的な長所を有する交流発電が次第に認められていき、Niagara falls における水力発電で交流式が採用され、勝負は決定的となる。アメリカを代表する2大電機会社である General Electric と Westinghouse との間に展開された人類史上最も激しいエネルギー戦争といっても過言ではないだろう。

(つづく)

文献

- 7) 森本哲郎：文明の主演 - エネルギーと人間の物語，(2000)，新潮社。
- 8) <http://americanhistory.si.edu/lighting/19thcent/comp19.htm>
- 9) <http://www.ieee.org/organizations/society/power/subpages/resources-folder/edison-folder/toc.htm>
- 10) <http://www.ieee-virtual-museum.org/exhibit/exhibit.php?taid=&id=159253&lid=1&seq=1&view=>
- 11) <http://www.teslasociety.com/index.html>
- 12) <http://www.pbs.org/tesla/index.html>
- 13) http://www.telluridetectfestival.com/about_techfestWestinghouse1.html

関西支部 京機会MOTセンター（KMC）活動報告 第2回

KMC事務局 中谷 征司（S37卒）

京機会会員の技術と経営分野の豊富な経験にもとづく情報ネットワークを構築して、MOT人材の育成・起業支援と、OB会員のキャリア活用を2本の柱とする京機会MOTセンターを設立しました。

前回ご紹介した京機会会員からのアンケートをもとにして、現在会員の登録をすすめ、活動の基礎を固めている段階です。



1. 設立発起人総会

日時 平成18年11月1日、ホテルグランビア大阪、参加 14名

内容) 発起人名簿 確定

若林 穰	1947	浜野 清士	65	各務 嘉郎	70
西田 弘	53	川合 等	67	清水 裕一	75
坂戸 瑞根	57	平田 誠計	68	小畠 敬良	77
中谷 征司	62	林 完爾	68	姫田 篤	80
棚橋 啓世	64	並木 宏徳	69	常光 瑞穂	97
村田 哲也	64	松久 寛	70		

) KMC運営規約 承認

) KMC運営本部 会長 選定 坂戸 瑞根氏（昭32年）

規約により、会長は11月11日関西支部運営委員会の承認をいただきました。

2. 会員キャリア支援事業 試行

京都リサーチパーク（KRP）が宇治市の委託を受けて実施している宇治ベンチャー企業育成工場（宇治VIF）支援業務の一環として開催している、地元中小企業を対象とするセミナーの一部をKMCが担当しています。

シリーズ講演会テーマ 「経営のスピードをあげる」

）第1回 シーズ型製品のマーケット戦略 坂戸 瑞根氏（昭32年）

10/24

自社オリジナル製品を作りたいベンチャー、中小企業にとって、販路をどう作るかが大きな課題です。技術シーズとニーズのマッチングをどうすればよいのか 古くて新しい問題を、講師の豊富な経験をもとに種々の取り組み方の紹介をしました。



）第2回 研究開発資金の調達方法 岩崎 隆二氏（昭45年）

11/28

中小企業にとって、返済不要の補助金、助成金や、低利の公的資金を如何に調達するかは、企業の飛躍に直接つながる課題です。講師が実際活用された各種開発補助金などの取得のコツ、取得後の社内体制のあり方など実績に基づく、迫力ある講話をされました。



関東工場見学

SMILE 運営委員 嶋本 淳

jun.shimamoto@t02.mbox.media.kyoto-u.ac.jp

京機学生会執行部 SMILE は 11 月 24 日と 25 日の二日間、京機会関東支部のご協力を得て、関東地方に在籍する企業を見学し、関東支部に所属する OB の方々と交流をする目的で「関東工場見学」を行った。今回の工場見学には、修士 1 回生が 18 人、学部生が 2 人の合計 20 人の学生が参加した。主な日程は以下のとおりである。なお、私たちの先輩である機械系技術者は幅広い分野でご活躍されていることを踏まえ、将来のキャリアを考える上で視野を広げたいと考え、下のように今回は異なる業種の企業 4 社を一度に見学することにした。

11月24日(金)	午前	日産自動車 横浜工場 見学
	午後	旭硝子 京浜工場 見学
		全日本空輸 羽田空港機体メンテナンスセンター 見学
	夜	新日本製鐵・新日鉄エンジニアリングの社員との懇親会



11月25日(土) 午前新日本製鐵 君津製鉄所 見学
午後三菱みなとみらい技術館 見学
OBの方々との交流会・懇親会

各工場では業態も規模も全く異なり、また見学内容も生産ラインや開発現場など異なるものだったため、よく比較することができた。また、参加者の多くが就職活動を控えた修士1回生ということもあり、見学先では熱心に社員の方と質疑応答が行われた。

さらに、今回は京機会関東支部の方々をはじめ多くの社員の方と交流させていただく時間を長く設けた。

とくに二日目の午後は、懇親会の前に4グループに分かれて「学生と社会人の違いについて」というテーマで2時間ほど、学生とOBの方々と意見を交わした。参加者からは「社会人の方から深く貴重な意見を聞いて、非常にためになった」とのような感想が聞かれ、概ね好評だった。さらに引き続き行われた懇親会でも多くのOBの方々にご出席いただき、交流会では聞けなかったような様々なテーマについてにぎやかに談笑している様子が窺えて、盛況のうちに閉会となった。

2日間という短い期間だったにもかかわらず、工場見学に加え社会人との交流も深められ、とても濃い内容になった。参加者には、この企画が将来のキャリアを考える上で参考になれば幸いである。また、今回のような充実した企画が実現できたのは京機会関東支部の方々のご協力によるところが大きい。ここに感謝の意を表したい。

